

足立卷一＝作

大と真

—おじ子育て記



道大

卷一
大と真

理論社刊



足立巻一

1913年東京に生まれる。1948年児童詩誌『きりん』の編集に参加する。著書に『詩のアルバム』『子ども詩人たち』『大衆芸術の伏流』『鏡——詩人九鬼次郎の青春と歌稿』『バカらしい旅行』『きりんの本』『おとうさん』『おかあさん』（以上理論社）『やちまた』（河出書房新社）などがある。1975年『やちまた』により第20回芸術選奨文部大臣賞を受ける。現在神戸女子大学教授。
住所—神戸市須磨区若木町1—10—9



作者 足立巻一(あだち・けんいち)

NDC 913 A5変型 20cm 212 p

画家 宮本忠夫(みやもと・ただお)

8393—31520—8924

大と真

1981年7月第二刷発行©

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町104番地 電話 03(203)5791 振替口座 東京9-95736

足立巻一

大と真

——もくじ



I 不幸

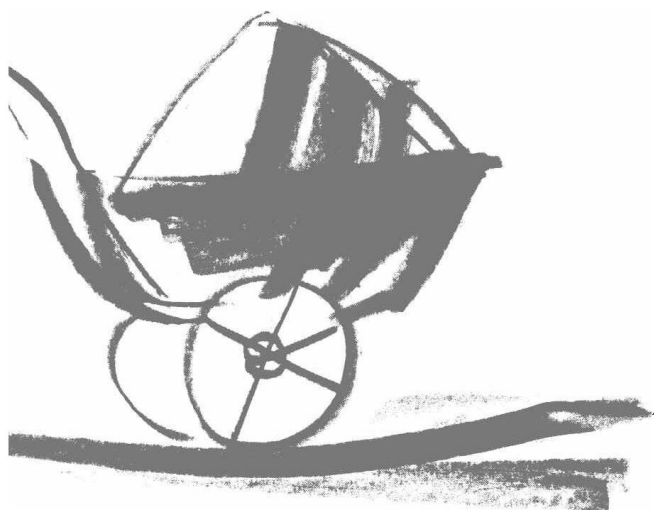
生まれる 6 死児 9 産院で 15
 命名 17 変事 21 嫁の入院 30 迷
 う 33

II 成長

入来 38 風呂 42 松田先生 45 夏・
 家族 49 噛む 55 這う 58 坐る 63
 病む 66 立つ 69 檻 71

III 閃く手

多忙な正月 76 カゼひき 80 小公園
 で 87 梅の花 91 誕生日 95 世話
 が焼ける 97 青葉 102 自動車 104



IV 波 乱

風疹騒ぎ	I	108
嫁の退院	120	不在
れる	123	惑う
135	126	II
		112

V 一歳半のころ

メガネ	142	冒険	145	空虚	148	ブレ
ーキ	152	発見	154	老人	156	水遊び
159	食べる	162	眠る	165	音楽と舞	
踊	167					

VI 赤ん坊よ

陣痛	172	真の字	177	対面	185	こと
ば	190	花見	195	個性	201	

エピロオグ ばく赤ちゃんのとき……

あながき 211

205

そうてい・さしえ

宮本忠夫

I ● 不幸





生まれる

に生まれた。

わたしが大の字と呼ぶ赤ん坊は、一九七五年三月二十五日夜明け
《生まれる》ということばは《生む》の自動詞であつて、古語はラ行下二段に活用する。語源についてはいろんな説がある。

一説は《ウミ（産）アレ（生）》がつづまつたことばではないか、という。その《アレ》は『古事記』などに用いられているように神霊・神秘の出現をいった。また、朝鮮語では卵をヒというので、卵に関係があることばかもしれないという推測もある。

ほかに、子を生むときに妊婦にんぷがあげる激しい呼び声からきたという説もあるし、子は子宮内の血の《海》に乗ってあらわれるから《海》の類訓ではないかという意見もある。そのほかにいろいろあつて、そんなに語源説が多いというのも、人びとが《生まれる》ということばにこもるものをあれこれ思いめぐらしたからであろう。

わたしにしても、これまで三人の子を生み育ててきたけれど、大の字の場合ほど、このことばについて考えたことはない。といつても、どの語源説に従うとか、新しい説を出すといつてもりはさらさらなかったのだが……。

大の字が生まれる前ごろ、わたしは妻とともに東京の娘の家にいた。娘は二年前の春、建設会社に勤める技術者と結婚し、鉄筋アパートの杜宅の一室にふたり暮らしをしていた。建設会社だから、狭いながらも設備は割合よかつたけれど、近くを工業地帯へ通じる産業道路がよぎつていて、終日、大型トラックが地響き立てて疾走しそしていた。

神戸住まいのわたしが娘の家にに向いたのは、前年に発行されたわたしの著書が、たまたまある芸術賞を受けることになり、その受賞式に出席するためであった。そして、久しぶりの東京旅行であったから、それを機会に、わたしも妻もしばらく滞在し、互いに古い知人をたずねてみようということになっていた。長男の嫁が身重ではあったが、予定日にはまだ少し余裕があるというので、そんな相談をきめたのだった。

受賞式の翌日、わたしの本を出版してくれた担当編集者と課長とが、ふたりだけでお祝いをしたいからと招いてくれた。下町の日本料理屋の一室だった。大勢の会は閉口だけれど、相手は気心の知れたふたりだけだったので、いつもになくわたしはしゃべり、ゴマ豆腐や銀杏やさしみをつぎつぎに平らげ、よく酒を飲んだ。

わたしはすっかりいい機嫌になり、お祝いだという万年筆を押しただいて娘の家に帰ったのは、十一時をまわっていた。

扉を開けるなり、妻がいった。

「男の子が生まれたのよ。大きな、元気な赤ちゃんだって」

妻の声は、うわずっている。

わたしも咄嗟には返答ができず、「そうか」といっただけである。

婿も娘もまだ起きていて、部屋の中には明るくはずむものが満ちているようだった。

「とにかく、すぐにも帰らなくちゃ」

妻がそういうのに、婿が浮き浮きしたことを重ねた。

「あす正午の飛行機をとっておきましたから」

「ありがとう、それで帰ろう」

わたしと妻とののんびりした滞在計画は吹き飛んでしまった。

寢床にはいったが、みように目がさえた。

わたしが賞を受けた本というのは、本居春庭もとけはるにわの伝記を中心にした記録だった。春庭は宣長のりながの長男に生まれながら、三十二歳のころに原因不明の眼病で失明した。以来、鍼医はりいを志し、家督かふくも養嗣子ようし本居大平に譲ったが、父がなくなつた七年めの文化五年（一八〇八）、動詞の活用を研究した『詞八衢ことばのやちまた』を突然に刊行し、さらに動詞自他の研究を中心とする『詞通路ことばのかみち』三巻を成した直後、文政十一年（一八二八）六十六歳で死去した。

春庭が『詞八衢』と題したのは、ことばを道にたとえ、そのはたらきが多岐たきに分かれた道のようにさまざまに変化するからだというのである。が、春庭を調べてゆくにつれ、ことばだけがやちまたであるのではなく、人の生きてゆくこと自体がやちまただという思いがつのつた。人はつねに八方に分かれた辻に立ち、その一つを選んで歩けば、またやちまたに立つ。人は刻刻にやちまたを歩いて生きている。

春庭のやちまたを追っかけたわたしの著作はひとまず終わつたけれど、いま、ひとりの赤ん坊が息子の家に生まれたことによつて、わたしにはまた新しいやちまたの道がはじまつたと思わないではいられなかった。

わたしは睡眠薬すいみんぐすりを飲んで、ようやく眠つた。



死 児

朝、荷物をつくるとき、娘は「ほんとによかったわね」と何度も繰り返した。婿もしきりに、おめでとうございます、といった。

でも、わたしは相槌を打ってはしゃぎたてるのは、ふたりに相済まないような気になった。

どうして娘夫婦の子が先に生まれてくれなかったのだろうか？

娘は二十九歳のとき、やっと結婚した。これにはまったく苦勞した。いまでも一生の大仕事は娘の結婚だったと思っている。爾余のこと、軍隊に狩り出されたり著作したりした苦勞も、それにくらべれば物の数ではない。

娘にあらわな欠点があつたというわけではない。むしろ、人妻としては上等の条件をそろえているとも思う。ただ、性格はわたしに似て依怙地で、万事に好みが強い。それにわたしの職業もいくら縁談にさわれるところがあつた。結婚をすすめると、娘は逆にわたしを責めた。責められても仕方がなかった。あげくは無理強いするようにして結婚させたのである。

相手が無類に実直な男であつたので、結婚生活はうまくいった。

前年の六月、なまぬるい雨が降っていた。すっかり濡れて仕事から帰り、妻と遅い夕食をとっていた。

電話のベルが鳴った。

妻の応対ぶりから、相手は東京の婿だとすぐわかった。そのうち、妻の声はうわずり、受話器を置くなりいった。

「赤ちゃんができるのよ。予定日は十二月三十日ですって。きつといい子が生まれるわ。まわがないわ」

妻はむやみに上気していた。と、そのうちこちらまで浮き立ってきたからおかしかった。婿は「きょうはうれしのお知らせを申しあげます」と最初に切り口上を述べたそうだ。

娘はこちらに帰ってきて生むといい、早々と産院まで指定してきた。

六月十五日、その産院へはわたし自身出かけ、前金を払って個室を予約した。港に近い坂の途中の明るい産院だった。玄関には母子像の彫刻が置かれている。受付で待っているあいだも赤ん坊を抱いた若い母親が出たりはいたりし、乳のにおいがただよい、わたしは年がいもなくうつとりとなった。娘の結婚についての苦労が大きかったせいもあるだろう。

食事のときの妻との話は、娘の出産のことばかりになった。わたしの春庭についての本が出るのといっしょに、娘の子もこの世にやって来る――。

ところが、七月一日、仕事から帰ってくると、婿から電話があったと妻がいった。

「出血したんですって。すぐ病院に診てもらいにいったら、とにかく安静にしないといふことで……」

わたしは、すぐにキンちゃんに電話した。

キンちゃんは小学校・中学校がいっしょだった古仲間で、いまは近くで婦人科を開業している。気のいい奴だ。わたしは遠慮がいらないので、カゼでも下痢でもすぐ薬をもらいにゆき、わが家の主治医のようにつきあっていた。

「ちようど三ヵ月だな。胎盤が安定しない時期なんだ。それでよく出血するけれど、注射で止まるはずだよ。安静が第一。あんまり心配するな」

キンちゃんは、そういつて電話を切った。妻にそのことを娘へ伝えさせると、婿に作ってもらった夕飯を食べているところだという返事だった。

七月三日、電話した。婿が出てきた。

「夕方に少し出血するんです。一週間ほど入院して、ようすを見ようと話し合いました。尿の検査の結果では、赤ちゃんは無事だというんです」

案外に明るい声だった。それなら早いほうがいいから、あすにでも入院するように、と伝え、明朝、妻が直接病院へ手伝いにゆくことで話がきまった。

わたしは留守番をすることになった。

七月五日、妻は電話をかけてきた。

「出血がとまって、気分がとてもいいというの」

心配と安堵とが波のように定間隔を置いて襲ってくる。それがかえって息苦しいが、そのためにいい子が生まれてくるような気もするし、いっぽうでは、流れ去るものは去らせたらよい、と思ったりもする。

七月六日、妻からの電話。出血はとまった。八日が医師の回診だから、それで大体わかるだろう。

キンちゃんから電話がかかった。

「出血とまった？ そりゃ、よかった。でも、チョコレート色のものがおりるかもわからん。それが出て痛んだらイタチといつて流産だ」

妻は七月九日に帰って来た。娘はいたって元気だという。

「病院ではいろいろ検査してくださるんですが、原因がわからないらしいの。ただね、もう六カ月というのにペチャンコなの。あたしのおなかのほうがずっと大きいわ」

妻は、笑った。

七月十五日、妻はまた東京へ出かけた。その夜電話すると、娘はべつに変わったところもなく、蒸して持っていった芋を、婿が来るまで食べずにおく、といっていたそうだ。娘がいじらしくなる。

七月十九日、妻からの電話で、きょう退院した、という。決着がついての退院ではなく、胎児が小さいが原因がよくわからぬので、家でしばらくようすを見ることにしたのだった。

どうして、そんなに胎児が小さいのか？ 子宮外妊娠だったり奇形だったりでなければよいと願う。

七月二十一日午後、息子が前ぶれなしでやって来て、「ねえさん、どう？」といつてから「うちのやつ、妊娠したらしい」。

「妊娠攻めだな」

わたしは思わず苦笑した。

翌日から十日ほど出張しなければならない仕事があり、妻に電話をかけたのは七月三十日で



あつた。胎児は死んでいた。

「あきらめきれませんが、仕方ありません……」

妻の声は重かった。やがて搔爬しなければならぬ。なんと嫌な字面であろう。娘は、搔爬がつぎの妊娠に支障をきたさないかと、そのことばかり医師に念を押していたという。婿の気落ちもひどいだろう。「きょうはうれしいお知らせを申しあげます」と切り口上で知らせてきた日のことを思う。妻の話では思ったほどよくよしていないというが、それはわざとそうふるまっているからにちがいない。

息子に電話した。息子は「そう」と返事してから「うちのやつも痛むといいでした。あす医者に診てもらおう」とつづけた。気の重い語調だった。わたしも短く「注意しろ」といって電話を切った。

キンちゃんに電話すると、「メソメソしなさんな。おろしたらすぐできる」と景気をつけてくれたが、気分は沈むばかりだ。

八月一日、搔爬は手軽に終わった。妻の声は存外に明るかった。

「きようはつらいねえと三人で話してたんですけれど、もうおりかけていて理想的に出たんですって。本人はピンピンしております」

わたしは安堵した。と同時に、やりきれない気がした。もう五カ月になっていたから、性別もわかったかもしれない。

死児のことに妻は一切触れようとしなかったし、わたしも知りたいとは思わなかった。でも、わたしの頭のなかには、血に濡れた肉塊がいつまでも映って耐えがたかった。本居春庭についてのわたしの本が出るころ、家には新しい生命がやってくると思っていたけれど、それも流れてしまった。

いま、そのころの記憶が唐突にも鮮明に、わたしによりみがえってきたのである。

バスの停留所まで娘が見送ってくれた。手を上げて小さくなってゆく姿を見ながら、娘がよけいにあわれに思われた。